

りゆうざえもんしたん
《隆佐衛門詞譚》(四)

『埃』
ほこり



くたけ
九谷

むくぢ
六口

きやりゆうざえもんかげふさ
木谷隆佐衛門影房

「この夜も魔うなされている。今夜は蕎麦の食い過ぎだ。うめき声で目が覚めた登世。また雪姫であるうかと蒲団の上に座りじつと見ていた。パツと起き上がった隆佐衛門。急に伸びをしてウツプとゲツプをした。

「登世。どうしたのだ。眠れぬのか。悪い夢でも見たのではあるまいな」

「何を申されますか、隆様のうめき声で目が覚めたのでございますよ。また、雪姫ですか」

「いや、夢など見ておらんかった。どうも、蕎麦を食い過ぎたらしい」

「まあ、人騒がせな。良い歳をして……」

「そう言うな。常吉の蕎麦は旨い。つい、何杯も喰ってしまふ。悪いのは常吉だ。怒るのであれば常吉を怒れ」

「何を申されるのかと思えば、常吉さんのせいにして。確かに常吉さんのお蕎麦は美味しゅうございます。しかし、三人で争うように食べ比べをするなど……。絹も呆れていましたよ」

「不思議なのだ。訳は判らぬが、あの二人と蕎麦を喰うとむきになってしまふ。まるで子供の喧嘩のようなものだ。実に他愛のないことなのだが……」

「隆様は、子供の頃から侍として厳しい躰の中でお育ちになり、心を開けるお友達もいなかったのでは……。あのお二人とご一緒の時は、幼馴染みのように顔をほころばせていらつしやいます」

「そうだな。父からはいろいろなことを学んだが厳しい父だった。常に姿勢を正し、喜怒哀楽などおくびにも出してはならなかった。そう言うものだと思っておった。遊び相手も今考えてみればいなかったように思う。裏長屋に住むようになって知ったが、町人は嬉しければ馬鹿笑いし悲しければ大声を上げて泣く。こちらの方が良い。武家の暮らしは堅苦しくていかんな」

「では、隆様、今は幸せですか」

「当たり前だ。このように優しく美しい妻がいつも傍にいてくれる。これ以上、何かを望みなどしたら罰が当たるわ」

「まー、ぬけぬけと……。そのような甘い言葉で何人の女子おなごを泣かせた事か……」
「登世、拙者、今まで女子を泣かせた事などないぞ。これからは、判らぬがな」

「また、隆様は、そのような意地悪な事を……」

隆佐衛門は、しばし国の事を思い出していた。父親は勘定奉行勘定吟味役であつ

た。父の後を継ぐべく子供の頃から厳しい勉強、修行の毎日が続いた。家督を継いだ後も亡き父の仕事振りを思いだしながら研鑽を続けた。遊ぶことなどはなかった。一人で独楽を回したり凧を揚げたくらいか。別れた妻、和代とは好き合っつて一緒にあった。まだ若い二人ではあったが、武家として格式を重んじる暮らしをした。お家取り潰しがあるまでは幸せな毎日であった……

隆佐衛門は頭を振った。過ぎ去つた事ではないか。すでに遠い思い出となっている。そのような事実は確かにあった。だが、頭にふーっと浮かぶ当時の出来事にも心動くことはなかった。

松浦は繁盛していた。登世を中心に店の者は甲斐々々しく働いている。隆佐衛門は、のんびりとした毎日。絹は琴の稽古の合間をぬい、店を手伝うようになっていた。隆佐衛門が来てからは登世に懸想する男は居なくなっている。しかし、今度は絹である。まだ、子供ではあるが、いずれ息子の嫁にとの縁談もいくつか舞い込んでいる。商人だけでなく武家からも話がある。侍が町人の娘と結婚する事はできないが、侍の家に養女として迎えれば問題はない。登世は聞き流しているが、絹はそのような話を聞くと嬉しそうに鼻を動かしながら隆佐衛門に語る。

「お父様、如何いたします。また、絹を欲しいと言っています。美しいのも疲れるものですね」

隆佐衛門は冗談とは判つていても呆れて何も言えない。だが確かに絹は、日に日に美しい女へと育っているようだった。

たまに、部屋を覗くと文机に向かい何やら認めている。習字のためだけではなく、日々の出来事を記しているようである。日記であろう。物を書く時には、いろいろと思いを駆け巡らせるものである。思慮を深くすることは内面的な成長を促してくれる。絹は表面的な美しさだけでなく、内なる魅力も備えつつあった。

まだ、親娘おとこになって日は浅いとは言え、隆佐衛門は既に子供の将来を心配する人並みの父親になっていた。隆佐衛門は認めた物を見たくて仕方がない。しかし、いくら頼んでも絹は決して見せてはくれない。書いたものを見たいと登世にも話した事がある。

「母親にも見せないものを父親に見せるはがありません。それに、絹は今、自分のために書いています。いずれ何かを見せてくれるかもしれませんよ。その時まで待てば良いのです」

登世のきつぱりとした話に頷うなずかざるを得なかった。

たかとうげんえもん

高藤源衛門は、常吉の部屋で三日三晩、眠り続けていた。常吉は、なぜ自分がこの侍を家に連れてきたのか理解していなかった。しかし、志津を亡くし一人で暮らす毎日には、寂しさを感じていた。いくら志津があの世界で見えてくれるとは言え、語り合う相手が居ないのは辛い。いつものように屋台を担ぎ商いに精を出していた店を持ちたいと志津と夢を語り合った日々を懐かしんでいた。

——このお武家さん、今日も寝ている。疲れているのだろう。ま、これも何かの縁だ。どうなるかは判らないが、休みたいだけ休んでもらおう。

常吉、屋台を担いで出掛けていった。

源衛門は、静かに目を覚ました。自分が何故、此処にいるのか思い出せないでいる。周りを見れば裏長屋のよう。きれいに掃除が行き届いている部屋。プーンと煮干出汁の匂い。

——出汁の匂い……。あの蕎麦屋の部屋だ。そうか、木谷とか申す男と……。その後、蕎麦を喰った。

総てを思い出すのにかなりの時間が掛かった。

——何故、蕎麦屋に付いてきたのか……。江戸を離れようと思っていたはず……

源衛門は、蒲団の上で腕組みをしながら事の成り行きを考えたが、自分自身の行動を理解する事はできなかった。部屋には蕎麦粉、大きな鉢、棒、俎板や包丁がきれいに置いてある。蕎麦を作る道具だろう。振り返ると部屋の片隅に白木の位牌が置いてある。俗名志津と書いてある。源衛門は何の意識もせず手に手を合わせていた。

——あの男の女房か。若いのに可哀相に……

土間に下りてみた。かまどには大きな鍋。戸を開け表に出た。薪が積まきんである。源衛門は鉋たをつかんだ。丸い木の上に太い薪を置いた。鉋を振りかざし打ち下ろした。クーンと音を立て、薪は真二つに割れた。クーン、クーン……。源衛門は無心であった。きれいに細く割れていく薪。鉋を打ち下ろすたびに自分の中に渦巻いていたドロドロとした何か飛び散っていくような感覚を覚えた。

隣の鶴が顔を出した。

「あら、お武家様、精が出ますね。まー、きれいな薪。常吉さんに頼まれたのですか」

あの男、常吉と言うのか。源衛門は鶴の顔を見た。

「ちと、うるさかったかな。済まん。実はな奥方、薪を割るなど初めての事なのじゃ。気持ちの良いものじゃな」

鶴は、びっくり仰天した。

「ちよ、ちよつとお武家様、い、今、何て言いました。お、奥方……ですか」

鶴が腹を抱えて笑い出した。自分でも止められないのであるうか、馬鹿でかい笑い声が続いた。こうなると長屋である。そここの戸が開き女房どもが顔を出し、源衛門の周りに集まってきた。

「お鶴さん、あんたどうしたのよ。普段から大きな声だけどさー、その馬鹿笑いは普通じゃないよ」

源衛門は途方にくれていた。しやがんだまポカーンと女房たちを見ている。

「だつてさー、このお武家様つたら、わたしの事を奥方なんて呼ぶんだもの。生まれて初めてだよ、奥方なんて呼ばれたの」

「エーッ！ お武家様、お鶴さんを奥方なんて呼んだのーっ！ やーだつ！ 奥方だつて」

源衛門にとり、女たちに取り囲まれるのも初めて。このように気さくに語りかけられるのも初めてのことである。何を言って良いか全く判らない。からかわれているようにも思えるが悪意は感じられない。自分の知らない世界が、ここにはある。

「しばし拙者の言う事を聞いてもらいたい。何故に皆はそのように笑うのじゃ」

「お武家様、だつて、あたしたちは町人だよ。奥方つてのはお武家様の奥さんたちの事だよ」

「で、では、何と呼べば……」

「そうねー、せいぜい奥さんだね。でも、ここに住むんだつたら名前を覚えなくっちゃね。この人は、鶴。あたしは、亀。こつちの人は竹。あそこで腹抱えてるのが梅。ねー、お武家さんは何ていうの」

「せ、拙者か。拙者は高藤源衛門頼義よしかと申す。以後、お見知りおきを」
「あれまー、凄いな名前だねー。ねー、どうして常吉さんの所にいるの」

源衛門、言葉に詰まってしまった。拙者は、何故ここに居るのか。聞きたいのは自分の方である。お武家様と呼ばれるたびにツクンと胸が痛む。

今まで刀に、侍にしがみついていた。何人を切ったであろうか。人を切る事が天分だと思っていた。その自分が何故、自らの行き方に虚しさを感じてしまった

のか。刀を侍を捨てようと思った。今までの総てを捨てようと思った。刀は捨てたが、身に付いた侍は浪々の身になり、既に二十数年が経った今も、そのまま残っている。

考え込む源衛門。女房たちは、笑顔で見ている。源衛門は、ふーっと女房たちを見回した。力強い眼差し。その目が子供のようにならぬかと興味津々と輝いている。何よりも驚く事は、優しさを持つていことだ。源衛門は、その時、何かを悟った。

「拙者にとつて、ここに居る方々は奥方様でござる。常吉の所に厄介になつてゐるが宜しくお願いしたい。ところで頼みがあるのだが聞いてはくれぬか」

「あんたつて、顔は怖いけど優しそうな人だね。頼みがあるんなら言つてごらんよ。お金は貸せないよつ。でも、一晩付き合えつて言うんなら考えるけどね」

また馬鹿笑いが起こる。源衛門はもう驚かない。

「拙者、刀を捨てた」

一瞬、皆が静かになつた。刀を捨てるとは侍を捨てる事。

「まだはつきりはしてゐないが、どうも常吉の蕎麦屋を手伝うことになりそうなのだ。しかし、身に付いた言葉遣いなど、町人になるのは、この歳になり難しいと思つておる。顔を見たら話しかけて欲しいのじゃ」

馬鹿笑いをしても人情の厚い女房たち。源衛門の真摯な態度に涙する者もいる。一人一人の胸に去来するのは優しさだけ。

「何だか良く判らないけど、この人がそう言うんだつたら嫌になるほど話してあげようよ。でもお武家さん、ここに居るならあたしたちは源さんと呼はせてもらうよ」

源衛門は、温もりを感じていた。

源衛門の仕事は薪割りだつた。まだ蕎麦を作る事は出来ない。常吉は、既に源衛門を身内と思つてゐる。朝は源衛門の方が早く起きる。部屋の前で体を動かし薪割りを始める。すると近所の女房たちが起きだしてくる。

「源さん、今日も精が出るね。お陰で寝坊しなくなつたよ。亭主なんか喜んでゐる」

「源さん、あんた奥さんは居ないのかえ。結構、苦みばしつたい男なのにね」

「源さん、あんた腕は立つのかい。刀を捨てたつて言つたけど未練はないのかい」

「源さん……」

「源さん……」

以前の源衛門であれば、このうるささに怒鳴つていたであろう。今は、ニコニコ

としている自分に驚いている。

——不思議なものだ、刀を捨てただけで、こうも人間の気持ちは変わるのか。しかし、薪割りだけと言うのも気が引ける。何か遣らせてもらえないものか。

常吉は、煮干出汁を作っている。一通りの下ごしらえが済んでから朝飯を食う。

「常さん、拙者……、いや……あつしにも何かさせてもらえないものか。薪割りだけではどうもなー」

「はははー、それはそうでしょうね。では、飯を喰い終わったら手伝ってもらいます」

茶碗や小鉢は源衛門が洗う。常吉がいくら言っても拙者に遣らせろと言っていない。常吉は任せる事になっている。部屋には大きな打ち板が置かれ、打ち棒で伸ばした平らな蕎麦がある。

「源さん、この平らな蕎麦を三つに畳んでくれますか」

源衛門は遣ってみたが柔らかい蕎麦は言う事聞かない。常吉が黙って蕎麦に粉をまぶした。ささーつと蕎麦をなで、三分の一ほどのところに打ち棒を置き蕎麦を返した。同じようにもう一方も折る。三つに畳まれた蕎麦になった。するとすぐに蕎麦を元にもどした。源左衛門の番だ。今度は上手くいった。源衛門がニコツと笑った。常吉は、あの厳いかめしかった人間が、このような笑顔をするようになるのかと不思議な気持ちになっていた。

次に、小間板と蕎麦切り包丁を置いた。説明するまでもなく、源衛門は小間板を蕎麦に置き包丁を持った。

「常さん、蕎麦は細い方が良いのかな。拙者が……、どうもいかな、あつしが……」

「源さん。無理にあつしとか言わなくても良いのでは……。私は、源さんが拙者と言うと何だか楽しいですよ」

「そ、そうか。何事にも無理はいかな。ところで拙者は蕎麦の切り幅は厚さと同じが良いと思うが、どうなのかのー」

「源さんの言うとおりで。でも初めての人には難しいですよ。少し幅広でも良いですよ」

源衛門は、目をつぶり右手の指で蕎麦の厚みを計っている。小間板を蕎麦の上に置いた。包丁を持ちサクンと蕎麦を切った。小間板をちよつとずらす。このずらした間隔が蕎麦の厚みと同じでなければならぬ。源衛門は間隔をじーっと見ている。左手で小間板を押さえサクンと切った。常吉もじっと見つめる。源衛門は続けてサ

クン、サクン、サクンと蕎麦を切っていく。

常吉は目を見張った。包丁は完全に垂直に下ろされている。半尺ほど切ったであろうか常吉が声を掛けた。

「源さん、ちょっと待ってください」

「うっ、何か拙い事でもしてしまったかな」

「源さんは蕎麦を切るのは初めてと言っていましたね。本当ですか」

「拙者はこのような平たい蕎麦に触るのも初めてでござる。常さん、小言でも良い遠慮せず言ってくださいぬか」

常吉は、源衛門が切った蕎麦を持ち上げ蕎麦粉をまぶした。

「源さん見てご覧なさい。この綺麗な蕎麦を。こんなに細い綺麗な蕎麦を見るのは初めてです。源さんは凄いです。源さん続けてくれますか」

サクン、サクンと源衛門は蕎麦を切り出した。

常吉は、土間に下り大釜に湯を沸かし始めた。隣のかまどでは美味しそうな汁の匂いがしている。醤油と味噌を入れ常吉は味を調べている。グツグツと煮立った大釜の中に源左衛門が切ったばかりの蕎麦を入れた。さえ箸で蕎麦を動かしている。一煮たちただけで箸にあげた。その箸を持って井戸端いどばたに走る。桶かじに水を入れ蕎麦を晒している。水を切り部屋に戻ってきた。

「源さん、蕎麦を喰いましょう」

茶碗に少し濃い目の蕎麦汁を入れた。冷たく盛られた蕎麦を箸でつまみ蕎麦汁をつけズルズルと食べ始めた。源衛門は、ただぼーっと眺めている。常吉は、一気に半分ほどを喰ってしまった。

「さー、源さんも食べてみてください」

源衛門は、冷たい蕎麦など食べた事はない。汁をつけ喰ってみた。旨い。蕎麦の香り、硬めな歯ごたえ、ちょっと濃い目の汁の味。残っていた蕎麦を喰むるように喰ってしまった。

「ふー。常さん、この蕎麦は実に旨い。今までの蕎麦粉と違うのかな」

常吉は大声で笑い出した。

「源さん、私は一種類の蕎麦粉しか持っていないません。今までと同じ蕎麦粉ですよ」

「しかし、味が違うが……」

「源さん、それが蕎麦の凄いとところなんです。同じ蕎麦粉でも作る人によって味が変わります。それに切り方です。この蕎麦は源さんの味。この蕎麦は売れますよ」

「そういうものかのー。拙者には良く判らんが……」

これも人助けと傍らに座り背中を摩つてやった。

「旦那様は親切なお方ですね。でも、痛いのはお腹の方で……」

女は、自分で男の手を掴みお腹へと持つていく。滅多に女の腹など触った事がないこの男、妙な気分になってくる。頃合を見て女は、男の手を少し上の方にずらし始めた。もういけない。ふつくらとした乳房に手が触れると男は夢心地。ただボケーツと摩っている。

「旦那様、ありがとうございます。お陰さまで痛みも治まりました。地獄で仏とはこのような時に言うのでしょうか……」

男の方は、人助けとは気持ちの良いものだと思います。先ほどの手の感触を思い出しながら急ぎ足。家に帰り財布がないのに気付いた。

「ところで、どうするのじゃ。訴えるのか。良い思いをしたのであろうが」

「何をおっしゃるのですか。なげなしの金です。しかも人の親切心につけ込んで……。女房には怒鳴られるし、変な疑いは掛けられるし……。旦那、捕まえてください」

「旦那、見てください。この傷を。金を取られた上にこの始末です」

「女の甘い言葉に乗せられたおぬしが愚かなのであろうが。まんまと手口にはまりおつて。女とは何かあったのか」

「滅相もない。その気になった途端にやくざっぽいのが殴る蹴る。挙句の果てに金を盗られたんですから。あたしや何もしていません」

「手本通りの美人局つもとせじゃな。おぬしが本当に変な気持ちを持っていなかったのであれば被害に合ったことになる。最初から下心を持っていたのであれば奉行所は受け付けんぞ」

「旦那ー。あたしや堅物で通っているんですよ。誰に聞いても構いません。今まで女遊びもした事がないって言うのに……」

この男も商人。確かに堅い男。寺の縁日での事だ、女が与太者風の男二人にいやもんを付けられている。女は衣紋を抜いた小粋な中年増。この男、野次馬と一緒に周りで見ていたが急に女が男の懐に飛び込んできた。

「旦那、助けてくださいな。あたしがあの人の足を踏んだって言うんですよ。怪我をしたから治療代を出させて……。あたしは足なんか踏んでないのに……。ねー、二分ほど立て替えてくれませんか。後で返します」

聞けば家は近くだと言う。男は二分とは随分少ないが……と思いつつも立て替えてやった。

「ありがとうございます。地獄で仏……。旦那、家まで来てくださいな」
男の手をとり小体な家に。

「さーどうぞ。実はねー旦那さんつ。あたしお金ないんです。頭下げるだけのお礼では、あたしの気が済みません。ねー、別のものでお礼したいんですけど……」

女は、ふすまを開けた。蒲団が敷いてある。普通であればこの辺で気が付くものだが根っからの真面目人間。世間を知らない。こう言うこともあるのか、などとニヤけてしまった。女は襦袢姿になり蒲団に入っていく。男も羽織を脱ぎいそいそと蒲団に……。その時を見計らったように大声が。

「よーよー、昼間っから人の女房と何しようって言うのかよー。えーっ！ 随分な事を遣ってくれるじゃねえか。俺の女房は身持ちがいいって評判の女よ。亭主しか知らねー女房をたらし込みやがって。どうやって落とし前を付けてくれるんだいっ」
男は、ただアワワ、アワワと尻込みをするだけ。口を利くことも出来ない。そのうちに殴る蹴るの乱暴を受けてしまった。

「何か言ったらどうなんだ。えーっ！ いい事を教えてやろう。こういう時にはなー、金だよ金。金出せば今日の事は黙っていてやる。どうするんだい、えーっ！」
財布を出すと、中身全部を盗られてしまった。二両五分。

「旦那、あいつらを捕まえてください」

同じような訴えが五件ほど出ている。隼人はこのような事件は嫌いであった。抜いたくない。

——愚かな事よ。しかし、こう言うものかも知れんな。所詮、人間とは突き詰めれば男と女の絡み合い。しかし、好かんな。

懐手をしながら定廻り。熊吉には、その女を調べるように言っている。女一人に男は……多分、三人以上の悪者ども。手掛かりなど何もない。被害者たちは女の人相は覚えているものの、江戸には大勢の人間がいる。小体な家も調べてみれば空き家であった。犯人の手掛かりになるものは何も残っていない。隼人は、うんざりしていた。このような時には隆佐衛門の所にも行って愚痴をこぼすに限る。いそいそと松浦に向かった。

「旦那様、木村様がいらつしやいましたか」

隆佐衛門が部屋で片肘を付き、のんびりしているところに松が声を掛けた。

「隼人か。通してくれ」

隼人が冴えない顔で部屋に入ってきた。

「隆佐殿、世の中には愚かな男がなんと多い事か……。拙者、うんざりしておる」

「急に何を言い出すのかと思えば、当たり前前の事を。そのような辛気臭い顔をして、どうしたのじゃ」

隼人は訴えのあらましを話した。

「良くある話ではないか。男が男であり、女が女である限りこの手の犯罪は永遠になくならんよ」

「しかし、真面目な人間ほど、ふつとその気になってしまふものらしい。そこに付け込むとはなし。人を殺めてはいないが盗みは重罪じゃ。今度は身に付けている物を奪っている。追剥だ。追剥であれば同じ死罪でも獄門。連中は判っておらんのか。これまた愚かな事よ」

「そうであるな。落ちている物を奪っても十両以上であれば追落で死罪。拙者には出来んな」

「当たり前だ。あれだけの褒美を貰ったのだから」

「隼人、まだそのような事を言っているのか。おぬし、かなりしつこい性質だな。女に嫌われるぞ」

間の悪い時に絹が顔を出した。

「あら、隼人さん。また、女の方に嫌われたのですか」

「絹殿つ、また、とはどういう事でござるか。拙者、嫌われるほど女子と付き合った事はござらん」

「まー、変な強がり。全く女子にもてないと白状しているようなものですよ」

「絹、あまり隼人を苛めるものではない。女が絡んだ追剥に頭を痛めているところだ。そもそも隼人が女にもてる訳がない」

「まー、お父様ったら。隼人さんは真面目で男前です。何故、もてないのか絹には判りません。もつとも、にやけたところが玉に瑕かも知れませんが……」

「絹殿つ。それは褒めているのですか、貶しているのですか。拙者には良く判らな

が」

隆佐衛門と絹だけが笑った。

「ところで絹殿、権佐とはお会いになっているのかな」
「あら、なぜ急に権佐様のお話しが出るのでしょうか」

「い、いや。そのー、別にどうのこうのという事はないのだが……。ま、何と云うか、どうなのかなと思っただけの事でござるが」

隼人の狼狽振りは見ているも余り恰好の良いものではない。隆佐衛門は隼人と権佐が絹の事を気にしている事を知っていた。また、子供とは思うものの絹は、男どもの目を引くようになっていた。

「あの日以来、お会いしていませんが……。隼人様のように気楽にお越しただければと思っておりますのに……」

「……」

「隼人、何とか言え。黙っていては話が続かんではないか」

「い、いや、拙者、この度の追剥を受け持ってから何かと男と女の事が気になつてな。どうも余計な事を口走るようなのだ」

「男と女と申したが、今の話しとは関係なかるうが」

「……」

「お父様、この辺で隼人様を苛めるのは止めましょう。ねー、隼人様」

「な、何ともかたじけない次第。拙者、そろそろ暇いとませねばならぬ。絹殿、また寄らせてもらいたいが宜しいか」

「えー、大歓迎です。ねー、お父様」

隼人が松浦を出た時には夕暮れになっていた。絹の前では、どうも辻褃の合わない話をしてしまう。いかんなど思いながら同心長屋に向かっていた。松浦を出て程なく、堀割に差し掛かったが、何やら人がうずくまっているようである。目を凝らすと女のような。隼人は、ピンと来た。

——出おったな、女狐め。拙者を騙そうとは……。運の悪い奴だ。

傍に寄るとウンウン唸っている。相手の筋書きに乗ってみる事にした。

「これ、どうしたのじゃ」

「あつ、お武家様。急に刺し込みまして……」

中年増には見えない。もう少し若いようだ。新入りか。

「拙者が摩さすってやろう」

「あ、ありがとうございます」

隼人は背中を摩さすった。女は、まだウンウン唸っている。手を腹の方に持つていく

様子は無い。隼人は変だな、これでは拙者の財布を掏^することは出来ないが、と思いつつも疑っている。

「女、腹の方を摩った方が良いのではないか」

誘いを掛けてみた。女は消え入るような声で言った。

「いえ、そのようにして頂いているだけでも気分が……」

と言った途端、その場に倒れこんでしまった。隼人が顔を見るとまだうら若い女だ。しかも息も絶え絶えの様子。いかん、本物の病人だ。女を抱き上げたがグッタリしたまでである。

——どうしたものか……。おう、そうじゃ。松浦が近い。

隼人は、女を抱いたまま松浦に向かった。

「ご免、ご免。木村隼人でございます。誰か居らぬかつ！」

松浦は既に戸を閉めている。隼人は、扉をドンドンと叩いた。

「へー、へー。お待ちください。今、開けますゆえ」

中から声がした。くぐり戸が開き、番頭の茂助が顔を出した。

「木村様つ。如何いた……。あれ、病人……。木村様つ、早く中にお入りください」

茂助は二人を部屋へと案内した。騒ぎを聞きつけた松が来た。状況を見て蒲団を敷きだす。

登世も絹も来た。隼人は傍でウロウロしている。隆佐衛門も眠そうな顔つきで隼人の傍に来た。

「急病人。これは医者に見せた方が良い。茂助、お医者さんを……」

「いや、医者であれば拙者の方が詳しい。医者を連れてくるまで、この女を宜しく頼む」

言うなり隼人は、表に出て行った。

「さ、殿方は出てください。この娘さんの着替えをします」

登世の指示で松と絹が娘の着物を脱がせ、寝巻きを着せた。娘は意識がないのか人形のようにされるがままである。寝かせた途端にもどってしまった。額に触ると熱もある。手桶に水を入れ手拭を当てる。しかし、どうして良いか判らない。その時、絹は静かな声を聞いた。

『うつ伏せに寝かせなさい。仰向けではもどしたものが喉に入り、息が出来なくなります』

絹は判った。雪姫だ。娘をうつ伏せにした。娘は、またもどした。

四半時ほど経ったであろうか、隼人が医者を連れてきた。医者は部屋の匂いを嗅いでいる。娘の横に座り脈をとりながらもどしたものの匂いをしきりに嗅いでいる。無言だ。急に腕組みをし、顔をしかめた。酷い顔つきだ。周りの者はドキッとした。この娘、危ないのだろうか。医者は、まだ、顔をしかめている。狼狽し始めたのは隼人だった。もつと早く連れてくれば良かったのか……。隼人はガツクリと肩を落としている。

その時、部屋中に馬鹿でかい音が響き渡った。

「ハ、ハ、ハックションッ！」

医者がかくしゃみをしたのだ。

「いかな。風邪をひいたのかもしれない。気を付けねばならぬ」

「先生っ！ 先生の風邪なんかどうでも良いのです。この娘は助かるんですか」

登世が、もの凄い剣幕で医者に聞いた。

しよくあ

「食中りじやな。塩と水を持ってきなさい。この匂いから察するに生牡蠣。牡蠣に中つたのじゃ。しかし、うつ伏せに寝かせておつたが、心得を持ったものがおるのかな。良くあるのじゃ、もどしたものが喉につまり命を失う事がな」

松が持つてきた水に塩を入れた。ぐつたりしている娘を仰向けにし、半身を起こした。医者は娘の口を開け塩水を流し込んだ。一口目は吐き出したが、無意識のうちに塩水を呑んでいる。今度は娘をうつ伏せにした。娘の鼻をつまみ、喉に指を突っ込んだ。ゲーッ！ 娘はもどした。周りで見ているものは気が気ではない。医者は、同じ事を繰り返そうとする。

「せ、先生。そんな可愛そうな……」

登世は、思わず医者に言ってしまう。

「まー、そのように見えるかも知れんがなー、胃の腑を洗っておるのじゃ」

医者は、手桶で手を洗いながら言った。

「良かったな、牡蠣の毒は体に回っていないようじゃ。もう大丈夫。明日の朝には熱も下がり意識も戻るじやろう。明日、また診てやろう」

帰り際、登世が代金を払おうとすると、医者は、来しなに隼人から受け取っていると言う。道すがら隼人は、拙者がいけなかった、拙者がいけなかったと呟いていたらしい。

娘はスヤスヤと眠っている。松が付き添う事にした。

隆佐衛門の部屋で四人が話している。

「まずはホツとしたな。隼人、経緯いきさつを話せ」

「隼人様、ご自分のせいとは、どういう事なのですか」

「隼人様は、あの娘さんとのようなご関係なのですか」

矢継ぎ早に問い掛けられる。隼人は、まだ肩を落としている。

「拙者……てつきり追剥の一味と思ってしまったのだ。背中を摩ったが何時まで経つても腹の方に手を持っていかん。変だなと思つたら氣を失つた。もつと早く連れてくれればこのような大事にならなかつたものを……」

「まー、そう言うことだったのですか。隼人様、もし隼人様が通らなかつたら、あの娘さんはどうなっていたか判りません。良い事をなさいました」

「お母様の言うとおりでです。隼人様は、お優しい……」

「医者がかうつ伏せにしたのは偉かつたと言つておつたが、登世、知つておつたのか」

「いえ、あれは絹が……」

「私も知りませんが、多分、雪姫が……」

「雪姫っ！」

男二人が大声を上げた。そう言えば、最近は夢に出てこない。しかし、まだ成仏できていないのだろうか。

隼人は、隆佐衛門の部屋に泊まった。

翌朝、一番早く目を覚ましたのは娘だった。見慣れぬ部屋。傍を見ると見知らぬ女がコックリ、コックリと舟を漕いでいる。起き上がろうとしたが眩暈めまいがする。声を掛けた。

「あのー、もし……。あのー……」

松はピクツと体を動かし目を覚ました。

「あれまー、元氣になつて。どう、お腹は痛くない」

娘は、思い出した。

——私は、お武家様に助けられた……

「はい、大丈夫です。ご迷惑をお掛けしました。私は、千國屋の園そのと申します」

「あら、あの呉服屋さんね。ご両親が心配しているでしょう。丁稚を遣わせませぬ」

松は、登世に伝えた。

千國屋では、娘が居なくなつたと、上を下への大騒ぎの最中だつた。両親は早駕籠を仕立て飛んできた。

「何ともご迷惑をお掛けしました」

両親とも畳に頭を擦りつけて礼を言う。娘が無事だつた事を知り涙を流している。園は、ニコニコしているが、まだ起きる事は出来ない。

「お父様、お母様、申し訳ありませんでした。園は、お武家様にもお礼を言いたいのですが……」

登世が、隼人を呼びにきた。

「隼人様、お園さんがお礼を言いたいそうですよ。ご両親も来ています」

隼人と隆佐衛門は登世の後から部屋へ行った。あの娘、園と言うのか。隼人が一人ごちしている。

部屋に入ると両親は頭を下げた。亭主の方を見た隼人が頓狂な声を上げた。

「何じゃ、千國屋ではないか」

「あれーっ！ 木村様。園を助けて下さつたのは木村様でしたか……。流石、木村様。いやー流石、流石」

千國屋はしきりに感心している。

同心は定廻りの際、大店には顔を出す。千國屋も大店。亭主とは顔馴染みだ。

しかし、余りにも流石、流石と言われ肩身の狭い気持ちになつている。

「隼人、男を上げたな。たまには人の役に立たんとな」

「隆佐殿。今、拙者は珍しくも喜ばれておる最中。余計な事は言わんで欲しい」やつと普段の隼人に戻つたようだ。園は、ただジーツと隼人を見つめている。

医者が来た。園の脈をとり顔色を見たが、すぐに言った。

「良かったな。もう大丈夫だ。重湯でもあげてください。今日は、あまり体を動かさん方が良い。ところで生牡蠣だが漁師の間では流行つておるが我らは喰わん。何故、食べたりのじゃ」

千國屋は家族で舟遊びをした。船頭が、こんな洒落た食べ物はないと生牡蠣を勧めた。親たちは食べなかつたが園は面白半分、こっそり食べたらしい。舟遊びが終わり家に帰る途中、園は一人で散歩をしたと思つた。一人になつた途端に体の具合が悪くなり、掘割で休んでいたが腹が痛くなり、うずくまっている内に夕暮れ

になつたらしい。その後、隼人が通りかかった訳だ。

「松浦さん、私は商いがある。誠に申し訳ないがこの辺で店に戻りたい。女房を置いて行きますが、どうか今日一日、宜しくお願いいたします」

亭主は帰っていった。部屋では女四人が四方山話に花を咲かせている。園は、絹より三つ年上であつた。絹と園は気が合つたのか、しきりに話をしている。千國屋の女房は、昨夜一睡もしていなかつたのであるう、こつくりこつくりと居眠りを始めた。

隼人は医者と一緒に松浦を出た。眠くて仕方がないが勤めがある。奉行所へと向かつた。

奉行所に戻ると、熊吉が待っていた。

「旦那、殺しですぜ。金物問屋の伍平がやられました」

「伍平が殺られたつて。詳しく話してくれ」

伍平は腹を刺されていた。財布は盗まれたらしく無くなつてゐる。右手には、派手な襦袢の袖を握つていた。遣つたのは女のようなうだ。多分、女は襦袢の袖を取り返そうとしたのだらう。しかし、死に掛けた者の力は強い。女は諦めてそのまま逃げたようだ。隼人は襦袢の袖を手にとってみた。白粉の匂いが強い。中年増の女のものであるうか。とうとう人を殺したか。

常吉が二本松の前で屋台を開いている。いつもの事である。二本松の連中に混じり権佐もいる。常吉はワクワクしていた。源衛門が切つた蕎麦を出すつもりでいる。権佐にどんぶりを渡した。手にとつた権佐、うつと唸つて蕎麦を見ている。どんぶりを顔に近づけ鼻を動かした。

「常吉、いつもの蕎麦汁よりも色がうすいな。しかし、出汁の香りは強い。それはこの蕎麦は細く綺麗だ。旨いのか」

「権佐様、早く食べた方が良いですよ」

権佐は喰いだした。目を見開いて喰つている。顔つきが厳しくなつていく。汁を一滴残らず飲み干した。眩暈がしたのでらうか、ふらふらしている。常吉だけでない手下連中も心配そうな顔をしている。

「つ、常吉っ！ これは何だっ！ これが蕎麦か。これがお前が作つた蕎麦かっ！」
皆、何を言いたいか判らない。

「これは……。この蕎麦は……。出汁と一緒に蕎麦が舌にまつわり付く。驚くほど

の味わい。この舌ざわり……。噛みごたえがあるのに蕩けるように喉を滑っていく。
この上品な雰囲気……」

権佐は、涙すら浮かべている。

「権佐様。これは新作です。まず、権佐様に最初に食べてもらおうと思ひまして……。旨いですか」

「旨いっ！ 絶品じゃ」

「店を持つたら、この細い蕎麦を使って冷たい蕎麦を作ります。楽しみにしててください」

「何ー、冷たい蕎麦だと。冷たい蕎麦か……」

権佐は唸ったままでいたが、気を取り直して言った。

「常吉、店を持たなければ、その蕎麦を出せんのか」

「へー、夢屋の開店と同時に出そうと思ひています」

権佐の目が光りだした。

「店は俺が作つてやる。どうだ、二、三日で店が持てるが」

「お断りします。店は自分で……、いえ、身内と共に作り上げます」

常吉は、きつぱりと言ひ切つた。手下連中はびつくりして常吉を見ている。権佐の申し出を断るなど以ての外である。

「ワツハツハー。言ひおつたな。それで良い。それで良い。だが、身内とは誰のことだ」

「へー、源さんがいます」

「ほー、源さんと言うのか。会つてみたいものだな。常吉、早く店を持つてくれ。待ちきれぬわ」

蕎麦処「夢屋」は、もうすぐ開店する。

園は、よく絹のところどころに遊びに来るようになっていた。年は十六歳。絹の方が年下だが園は何でも絹に相談した。絹は気付きだしていた。

——お園さんは隼人さんを好きになつてゐる。

隼人は、熊吉と共に奔走していた。手掛かりは襦袢の片袖だけである。

ある日、同心長屋で袖を前に腕組みをしていた。何処にでもありそうな生地。

こんなものが手掛かりになるのだろうか。表に誰かいるようだ。ひよいつと表に顔を出した。

「お園殿つ。ど、どうしたのですか」

「あのー、入っても宜しいですか」

隼人は、慌てふためいた。人を上げられる部屋ではない。歩けば積もり積もった埃に足跡が残る。座りでもしたら埃が舞い上がる部屋である。

「暫しお待ちを」

部屋を掃除しようと思ったが、箒などない。あつたとしても掃いたりしたら埃まみれになる。部屋でモジモジしていると園が入ってきた。埃など気にしていない様子である。部屋に座った。舞い上がる埃に園は咽た。ゴホン、ゴホンと咳き込んでいる。流石の隼人も真っ赤になった。

「隼人様。ゴホン……。先日は……。ゴ、ゴホン。あのー、もし宜しければ外でお話したいのですが……」

隼人は、ほっとした。表に出ると園が風呂敷に包んだ物を渡した。

「これ私が作りました。どうぞ」

言うなり園は、すたすたと去って行った。隼人の赤面はまだ続いている。いかん、拙者はいかん。このような事態は考えてもいなかった。たまには掃除でもせねば。まさかお園殿が来るとは……。部屋の埃は落ち着いたようだ。そつと部屋に座る。風呂敷を開けると竹の皮に包んだ握り飯だった。隼人にとっては生まれて初めての事である。嬉しさが胸に込み上げてきた。震える手で握り飯を喰った。

ある夜、隆佐衛門が絹の部屋に目をやると行灯が点けられている。また日記でも……と思い、部屋に近づいてみた。話し声が聞こえる。絹が誰かと話している。しかし、もう一人の声は聞こえない。行灯の光で障子に影が映っている。変だ、影は一つ。まさか、雪姫と……。隆佐衛門は不安になり部屋に、と思ったが引き返した。何を話しているのだろうか。

翌朝、顔を合わせたのが普段と変わりがない絹である。隆佐衛門は、しばらく様子を見る事にした。

隼人は定廻りを終え、番所で熊吉の話聞いたが、やはり何の手掛かりもない。まさかこれ程でこずるとは思ってもいなかった。同心長屋に帰る事にした。

部屋に戻ってビックリしてしまった。部屋が綺麗になっているのである。オズオズと部屋に入ると塵ひとつ落ちていない。人が入ってきた。手拭を姉さん被りにした園である。手桶を持っている。

「お園殿っ！」

園は泣いていた。

「お園殿、先日の握り飯は旨かったです。それに今日は、部屋の掃除まで……」
何故、泣いているのであるうか。余りにも汚い部屋。掃除疲れで泣いているのであろうか。

「お園殿、何故、涙など……」

「隼人様、園は余計な事をしてしまったようです。埃だらけだったので……隼人様はお一人でお暮らしかと思っておりました。園は愚かでした。隼人様には既に女の方がいらつしやるなんて……」

「ちよ、ちよつと待つてください。拙者は、正真正銘、一人暮らしでござるが……」

「では、あの襦袢の片袖は如何なされたのですか。思いを寄せる方の物ではないのですか。しかも、私の店で売ったものです。何故、園はこんな辛い目に合わなければならぬのでしょうか。折角、良いお方にめぐり合えたと思っておりましたのに……」

園はシクシクと泣き出してしまった。隼人は、先ほどの園の言葉に体を硬直させていた。

——手掛かりが出来た。千國屋で扱った生地か。

「お園殿、悲しみの最中、誠に不躰ではあるが拙者とお店に戻ってもらえないものか」

片袖をもったまま、急に大きな声を上げた隼人に、園は泣くのを忘れ目を丸くした。隼人は園の手を掴み走り出そうとしている。隣の同心が顔を出した。

「おー、おー、木村殿、羨ましいですなー。綺麗な女子と手を取り合い、どちらまで……」

全く無視して走り出した。

手を握られているのは嬉しいが園は訳が判らない。この人、頭がおかしいのではなどと考え始めている。千國屋はビックリ仰天。大切な娘が男と手を取り合って駆け込んできたのだ。

「木村様！　いくら同心とは言え園はまだ嫁入り前の娘です。先日は命を助けられました。今日、今日の行状は親として許す事はできません。手を取り合って……。大勢が見たはずです。娘を傷者にして……。お奉行様に申し付けますぞ。訳を言ってください」

「あいや暫く。千國屋。これを見てくれ。これはおぬしが扱ったものと聞いた。如

何か」

隼人、まだ園の手を握っている。園も振り払おうとしない。

「確かに、これは私どもが扱ったものです」

「誰に売ったか覚えておるか」

「勿論でございます。このような派手な物は滅多に扱いません。良く覚えております。……木村様っ！」

千國屋が急に大声を出した。

「木村様っ！ いつまで園の手を握っているのですかっ！」

隼人と園は、あつと顔を見つめあい、急いで手を離れた。園は、握られた方の手を大事そうに胸に当てている。

「千國屋、売った相手を教えてくれぬか」

買って行ったのは東橋の側に住む遊び人風な男。にやけた顔で女房に贈ると言っていたという。

隼人は店を飛び出そうとした。

「木村様、園をどうしてくれるのですか。お奉行様に……」

「千國屋、事件が片付いたら、また来るゆえ、今日はそのまま行かせてくれっ」
ちらつと園に目をやり、隼人は出て行った。

絹は、この夜も雪姫と話していた。

「では、雪姫はまだ、思いを果たしてはいないのですね」

『……』

「そうですか。でも難しいですね。ご先祖様から受け取った懐刀ふしころがたなを見つけなければならぬのですか。もう何十年もまえの事……。大阪城と共に焼けてしまったのでは……」

『……』

「では、大阪城が焼ける前に何者かに持ち去られたと言うのですね。でも何故……」

『……』

「まー、そんな事があるのですか。籠城の準備の最中に落としたなんて……」

『……』

「それが悔やまれるし懐刀がなければ成仏できないのですか。拾った方の目星は……」

『……』

「そうなんですか。全く……。確かに江戸には大勢の人がいますが手掛かりが無ければ……。懐刀の特徴は……」

『……………』

「判りました。とにかく母にも聞いてみます」

熊吉の手下、亥助と牛蔵が東橋の付近で張り込みを続けている。女が人を殺めたが、これは連中にとつても誤算であつたはず。数日が経つたが目ぼしい女は現れない。既に逃げ去つた後かも知れない。二人にはイライラが募つていた。

隆佐衛門は閑であつた。絹も最近は一人で稽古に行つている。やる事がない。何か仕事と思つてはいても埒があかない。このままでは、このままではと考える毎日である。

権佐の屋敷に行くことにした。江戸は賑わつている。商人たちは店先で扱い物を宣伝している。行商人たちは派手な衣装で売り声を上げている。女子供ですら、店先に水を打つたり掃除をしている。周りが賑やかなほど気持ちは落ち込んでいく。

権佐は、何やら書いていた。

「木谷さん、ちよつと見てくれますか」

権佐は書いたものを見せた。花をつけた蕎麦の絵である。この男、絵も描くのか。中々の筆使いである。

「悪くない。しかし、真ん中には何も描いてないが……」

「ここに屋号を入れます」

「屋号。どう言うことだ」

「蕎麦処 夢屋」

「夢屋……。常吉か……」

「あの男、面白い蕎麦を考えています。どうも冷たい蕎麦のようです。木谷さんは細身の蕎麦を食べましたか」

「おう、喰つた。あれは旨い蕎麦だ。常吉め、どうしたのかと聞いてもニヤニヤしているだけで何も言わん」

「あの蕎麦を使うらしいが、店を開くまでは出さんと言う。早く店を持ってもらいたいのですが、手助けはいらなと言います。では、せめて屋号を書いた行灯でもと思ひましてね」

「権佐、では、拙者が屋号を入れよう。おぬしは蕎麦の絵だけで良いであろう」
「そうは行きませんよ木谷さん。最後まで私が書きます。横取りはいけません」
「まー、良いではないか。屋号くらい拙者に書かせろ。拙者の書は悪くないぞ」
二人は、では、どちらの方が面白い屋号を書くか比べようということになった。まるで子供の喧嘩である。楽しい。隆佐衛門は、権佐の生い立ちなど詳しくは知らない。しかし、どこか自分に似たところがあるように思っている。何枚もの書き物が出来上がった。双方とも譲らない。結局、常吉に決めてもらう事にした。

このような事でも、遣っていれば一日は過ぎていく。多少の空しさを感じながら松浦へと帰ることにした。東橋に差し掛かると岡引が近づいてきた。

「お侍さん。ちよつと宜しいですか」

隆佐衛門が顔を向けると、牛蔵である。

「あれま、木谷様。こんな所で……」

「何だ、拙者がどこにしようがおぬしには関係ないであろうが。おぬしこそ何をしておる」

「失礼しやした。張り込みです。例の追剥でして……」

「そうか。張り込みの邪魔をしてはいかな。おぬしらも大変だな。隼人にも宜しく言ってくれ」

隆佐衛門は、また気持ちが悪く感じた。拙者、何かせねば……。俯ほかき加減で歩いていると、三人の男が一人の女を取り囲んでいるのが目に入った。他にも気配がある。見渡すと物陰に隠れ、この四人を見張っている者がいるようだ。隆佐衛門も身を隠しながら成り行きを見ることにした。

「おめーが、あんな事をするからいけねーんだよ」

「だって、手首を捻られたんだよ。あのままだったら、あたしや捕まっていたよ」

「何を言うか。聞けば金物屋だつて言うじゃねーか。逃げりや良かったんだよ。馬鹿な事をしやがって。このままじゃ俺たちも危ねーんだよ」

「じゃー、どうしろつて言うんだい。今まで誰が金を稼いだんだい。あたしじゃないか。一度、どじ踏んだからつて……とやかく言わないで欲しいね。馬鹿言っちゃいけないよ」

一人の男が女の手首を掴んだ。

「何、すんだいっ！ 痛いじゃないか」

「七首でも出されちや適わねーからな」

もう一人が女の首に紐を巻きつけた。と、隠れていた者が飛び出した。

「神妙にせよっ！ 北町奉行所同心木村隼人だっ！」

私たちは、ギョツとして隼人を見た。一人である事が判るとせせら笑って言った。「同心だか何だか知らねーが、一人で無茶するんじゃないやねえよ。怪我する前に逃げた方がいーぜ」

言うなり隼人に切り掛かった。隼人は呼子を吹こうとしたが、それどころではなかった。刀を抜いて立ち向かった。首を締めている男は手を緩めようとはしていない。女は足をばたつかせているが、所詮男の力に適う訳もない。隆佐衛門は、さつと近づき男の腕を掴んだ。

「何だてめーは。邪魔すんじゃない」

もう一人が隆佐衛門に刀を打ち下ろそうとした。隆佐衛門は右足で蹴り上げた。急所にも当たったのか、男は、ギヤーツ！と言ってぶっ倒れた。見ると泡を吹いている。首を締めている男が女から手を離し、隆佐衛門に切り掛かってきた。女は、その場に倒れた。男は刀を振り回すが、一対一であれば隆佐衛門の敵ではない。脳天を峰打ちされ、大の字に倒れた。

すぐに女を見た。ぐったりはしているが命に別状ないようだ。女が息を吹き返し、逃げようとした。しぶとい女だ。隆佐衛門は帯を掴み地面に押し付けた。女はへなへなと座り込んだが、隆佐衛門は手を離さないで隼人の方を見た。

隼人の刀を見るのは初めてだ。相手の男はまだ若いが刀を使えるようだ。侍崩れか。二人は正眼に構え対峙している。隼人は両手で刀を握っているが、ほとんど右手一本。左手は添えているだけだ。普通刀は、左手でしっかりと握り右手を添える。その方が刀を扱い易い。隆佐衛門は気付いた。隼人め、と思った途端、男が強烈な掛け声を掛けた。キ、ヤーツ！ と同時に右上に刀を振りかざし隼人目掛けて切り下ろした。凄まじい太刀筋。隼人は刀を水平にして刀を受けた。ガキツ！ 二人の刀はそのままの状態で鍔を削っている。力勝負である。どちらかが刀を引けば良いのだが、その瞬間に隙が出来る。凄いい形相で刀を押し合っている。

隼人の方が下位に位置している。上位の方が有利だ。と、隼人がふっと力を抜いたように見えた。相手が押し込もうとした瞬間、隼人が思いっきり体ごと押し上げた。男は微かに仰け反った。その瞬間、ほんの少し隼人に余裕が出来た。と、同時に隼人の脇差が男の腹に喰いこんだ。隼人は左手で脇差を持っていた。

隆佐衛門は、女の帯を掴んだまま言った。

「隼人、おぬし読んだのか」

「おー、読んだ。良く判らんが、研鑽せよ、検討せよ、修行せよと幾度となく書いてある。一人で修行した。隆佐殿、刀とは重いものだ。力がなくては片手で扱う事は出来ん。苦勞したが何とか体得したつもりだ。しかし、持てる武器を総て使うとの考えは実に合理的だ」

「新免武藏か……」

隼人は呼子を吹いた。後は亥助と牛藏に任せれば良い。

女と生き残った男二人は、獄門。首を晒された。

隼人が隆佐衛門を尋ねた。相談があると言う。

「隆佐殿、千國屋がうるさい」

「どういう事だ」

隼人は過日の出来事を話した。

「千國屋は拙者がお園殿を傷めものにした、責任を取れとわめいておる。ただ手を握つて走つただけなのにな」

「隼人、自分に素直になれ。園をどう思っておるのだ」

「拙者は……、拙者は、これが最初で最後の事と思う……」

「……」

「お園殿はじつと拙者を見つめるのだ。じーっとな。見つめられると拙者、ぼーっとなつてしまう。体も汗ばんでくる。一人で部屋にいてもお園の事が気になり仕事も手に付かん」

隼人は、お園と言いだした。

「……」

「やはり一緒になった方が良いのかのう」

「何をゴチャゴチャ言っておるのだ。だが、千國屋は本店。園はおんばひがき乳母日傘で育てられたはずだ。おぬしの扶持では、ちと心配だが」

「お園は変わっておる。拙者のあの部屋を見ても何も言わなかった。全く気にしておらん。掃除までしてくれた。握り飯も旨かった。片袖を見て泣いた……。このような女が拙者の前に今後現れるとは思わん」

「……」

「しかし、町人とは一緒になれんし……。おうそうだ、奉行殿に相談してみよう。

何とかしてくれるかも知れん。隆佐殿、心のこもった忠告、礼を言うぞ。決心が付いた」

言うなり隼人は出て行つた。隆佐衛門は思った。何だ、自分で話し、自分で決めた。礼を言われるには、ちと片腹痛いわ。

園は、北町奉行片岡新左衛門の養女になった。

隆佐衛門は、静かな毎日を送っていた。やはり遣る事がない。

——久しぶりに甚平長屋にでも行つてみるか。

長屋は、相変わらずのたたずまい。見栄えはしないが懐かしさがある。此処が江戸で最初に暮らした場所だ。国での厳格だが幸せだった毎日。突然訪れた出来事。此処での喰うか喰わずのカツカツの暮らし。自分たちも余裕がなくせに何かと明るく声を掛けてくれる女房たち……。今は、繁盛する店で何の不自由もないのんびりとした生活。隆佐衛門は、人生とは何が起こるか判らんし、何を良しとし、何を悪しとするかも判らんものなどと感慨に耽っていた。

ふと見ると常吉の部屋の前で男が薪を割っている。後ろ姿を見て思い出した。

——高藤だ。江戸を離れたのではないのか。あやつ此処で何をしているのだ。

隆佐衛門には気付いていない。クーン、クーンと薪割りを続けている。隆佐衛門は、そつと鯉口を切つてみた。薪割りの音がピタリと止んだ。高藤は右手に鉋をぶら下げたまま、ふらーつと立ち上がり、静かに振り返つた。あの時と同じ姿勢。隙だらけである。

「なんじゃ木谷さんではないか。これっ！ 悪ふざけをするものではないぞ」

「いや、済まなかつた。相変わらず鋭い感覚でござるな。恐れ入つた。して、此処で何をしている」

源衛門は、柔らかな顔つきで仔細を話した。

「そうであつたのか。あの蕎麦はおぬしが切つたのか。旨い蕎麦だ。ところで、おぬしの刀は拙者が預かつておるが……。あの刀、如何いたそう」

「不用だ。おぬしに差し上げる。好きにしてくれ」

「好きにせよと言われてもな。高藤、おぬし体はまだ刀を覚えておるな。鯉口を切つただけで体が反応しよる」

「これは当分消えんようだ。ま、致し方ない。無意識のうちに体が動く」

肌蹴はだけた源左衛門を見た。汗ばむ体は痩せてはいるが引き絞まつている。

ちらつと肌身に付けた物が見えた。刀袋かたなぶくろのようだ。

「おぬし刀を捨てたと言ったが、それは何じや懐刀あむしろがたなではないか」

「おー、これか。これは捨てられん」

源衛門は、刀袋を手を持った。鎧よろい通は別だが、男は懐刀などは持たない。

「しかし、汚い刀袋だな。ぼろぼろではないか。何か訳でもあるのか」

「高藤家に伝わるものじや。何でも、さるお方のもので大阪城が落ちる前に先祖が拾ったらしい。返そうと思っただが、そのお方は城と運命を共にしたらしいのだ。それ以後は肌身離さずお守りする事になったらしいが、詳しくは判らん。だが、拙者が生きている間は拙者が守る。もつとも、高藤家は拙者で終わるがな」

源衛門は、寂しく笑った。

「そうか、さるお方と言う事は、どなたか判らんのだな」

「知らん。だが守る。ところで今から蕎麦を切るが、見て行かぬか」

「おう、拙者、見た事はない。おぬしの技わざを見せてもらおうか」

「技かつ。おぬしも面白い男だなー。拙者の蕎麦は、なかなか評判が良いのだぞ」
自慢気に話す源左衛門。二人は声を上げて笑った。

絹は懐刀の事を登世に話した。

「絹、いくら刀屋だからと言つて、そう都合よく見つけられるものではありませんよ。雪姫のお気持ちは痛いように判りますが……」

「そうですね。絹は雪姫とお話をしていると楽しゅうございます。このままずっと成仏されない方が、などと思つてしまいます」

「これ、そのような事を言うものではありません。私も気をつけてはみますが……
難しいことです」

その夜、登世は隆佐衛門に雪姫の事を話した。ガバツと起き上がった隆佐衛門。登世はビックリした。隆佐衛門は床を離れ絹の部屋に行った。登世も続いた。

「絹、入るぞ。良いか」

「お、お父様。こんな夜更けに。あら、お母様もご一緒。何事でしょうか」

「絹、拙者は懐刀を見てはおらんが高藤が持つておる。さるお方のもの、大阪城落城以来、高藤家が守つていと申しておつた。ひよつとすると……」

「お父様、本当でございますか。雪姫が喜びます」

「しかし、妙なのだ。雪姫は高藤の事を知つておるはず。何故今まで懐刀の事を……」

…」

その時、隆佐衛門の耳に声が聞こえた。

『まー、高藤が…』

この声は登世にも、絹にも聞こえた。

『そうだったのですか。高藤家は雪姫、雪姫と尽くしてくれました。あの日も源之丞げんのじょうは、私の事を氣遣って城を出ると言ってくれました。でも、私には出来なかつた。籠城ろうじょうの準備は大変でした。源之丞は籠城の際、私を安全な場所に、と部屋を整えるために離れました。それが源之丞との最後になりました。源之丞が拾ってくれたのですね。気が付かなかつた』

「如何いたしますか。今は源衛門が守っています。懐刀を持つてくるように申しませうか」

『ほほ、源衛門が守っているのであれば、それで良いのです。あの世で、ご先祖様にお会いし仔細を話します。許してくれるでしょう。しかし、高藤家が守ってしてくれたとは…。世の中とは判らないものです。ほほほー』

三人は、ふーっとその場の空気が変わったように思った。

「源さん、話があるんですが」

常吉がいつもと違い、厳しい顔つきで話しました。源衛門は身を正した。

「源さん、私は店を持ちたい。金も貯まった。美倉町に手頃な店があるんです。間口が三間ほどの店で家賃も安い。そこで源さんに聞いておきたいんですが…」

「何かな。構わん、何でも聞いてくれ」

「源さんは、私と一緒に遣つてくれると思つてますが、いいですよ」

「……」

「源さん、何とか言つてください」

「常さん。本当に拙者を使つてくれるつもりか」

「源さんが居てくれないと店は遣つていけない。それには身寄りがない。源さんの事は詳しく聞いていませんが、国元に身内が居るようでしたら思い切つて江戸と一緒に暮らしたらどうですか。身内の方にも手伝つてもらえれば助かります」

「常さん、拙者には身内などおらんよ。天涯孤独。いつも一人じゃ」

「じゃー、これからも一緒に暮らせますね。二人は身内みたいなものです。今更、お父さんなんて呼べないし…。そうか、兄弟ですね。でも、兄貴と呼ぶのもくすぐったいし…。やはり源さんだな。今までどおり源さんと呼びましょう。早速、

美倉町の店を見に行きませんか」

常吉は、源衛門の返事など聞かずに自分で納得している。

源衛門が国を捨てたのは二十数年前。父親は、源衛門が元服すると同時に病に倒れた。矍鑠かくしゃくとした父親だった。母親は陽気な女だったが、父の死後、程なくして男とどこかに行ってしまった。源衛門を捨てたのだ。一人残された源衛門だったが、周りの者は情けを掛けるどころか駆け落ち女の息子と指差した。中には、礫ついでを投げる者もいた。源衛門が左目を失ったのは、この頃だった。冷たい仕打ち、刺すような目。この国に居る事は出来なかった。刀の腕を買われ用心棒、刺客などを遣った。女には興味を持たなかった。所詮、母親と同じ。信じる事ができなかった。ただひたすら刀に生きてきた。

「源さん、さー、行きましょう。二人の店を見に行きましょう」

源衛門は、操られるようにフラフラと立ち上がった。歩く姿もまるで木偶でくのように気の抜けたままであった。知らず知らずのうちに涙がこぼれた。涙を拭こうともせず常吉の後ろに付いて行った。

「源さん、もう少しです」

常吉が振り返った。

「あれ、源さん泣いてるんですか。ど、どうしたんですか」

源衛門は、立ち止まり常吉の手を握った。立つたままの嗚咽おえつ。常吉は目を白黒させている。

「常さん。常さん」

源衛門の口から出る言葉は、これだけだった。

開店には甚平長屋の連中が総掛かりで手伝った。店は大工の八五郎が仕立てた。この店は外から蕎麦打ち、蕎麦切りが見えるような造りになっている。常吉が大鉢で蕎麦をこね、打ち棒で打つ。打った蕎麦を源衛門が切る。源衛門は着流し姿に前掛けをし、右腕だけをたすき掛け。集まった客からは、いよー蕎麦切り名人っ！ などと声が掛かる。源衛門は満更悪い気はしていないはずだが苦みばしった顔でサクン、サクンと蕎麦を切る。

行灯にも灯が点ともされた。隆佐衛門と権佐が見ている。拙者の字は捨てたものではない。私の絵は、いつ見ても美しい。二人は顔をほころばせご満悦。

今日は開店を記念し蕎麦は無料。勿論、滝の白糸の盛り蕎麦だ。薬味には刻んだ

葱。まず、長屋の連中に蕎麦が振舞われた。蕎麦を盛った笹ささを運ぶのは、何と隆佐衛門と権佐。二人も着流しにたすき掛け。二人は蕎麦屋になりきっている。へーい、お待ちっ！ などと威勢の良い言葉と共に笹を運ぶ。

そこ此処からズルズル、ズルズルと景気の良い音が、そして、旨い、旨い声が聞こえてくる。

金にうるさい甚平が祝い金を常吉に渡した。常吉が店を持った事が余程、嬉しかったのであろうか、鼻水と一緒に蕎麦を喰っている。

次は、松浦の番だ。登世も絹もいる。大番頭の嘉吉などは凶々しくもお代わりを言ったが、登世に今日は遠慮しなさいなどとお小言をいわれた。謹厳実直な嘉吉が、むくれた顔をした。店は爆笑の渦。

二本松の番だ。権佐が蕎麦を運ぶと、親分、申し訳ごせんなどと頭を搔くが、喰い始めると権佐などはそつちのけ。何とも騒々しい喰い方。

道行く者たちにも声を掛け、店の中に。初めて口にする盛り蕎麦。

喧騒の一日が終わった。

店に残った隆佐衛門に常吉と源左衛門が加わった。四人が喰う番だ。店に入ってくる者がいる。隼人だ。あー疲れたと言って座った。大笹にてんこ盛りの滝の白糸。隆佐衛門と権佐が、そーっと箸でつまみ、蕎麦汁につけ口にした。権佐などは、一口喰って固まっている。この時、権佐は挿すった山葵わさびを思い付いた。後に薬味として葱と山葵を付ける事になる。

権佐は遅れをとっていた。四人は凄まじい勢いで蕎麦を喰っている。隆佐衛門が言った。

「隼人、おぬしは手伝っておらんのに……。少しは遠慮しろ」

「そういうな。こんな旨いもの。遠慮などしていられるか」

その後、五人は無言。ズルズル、ズルズル。蕎麦をすする音だけが響いた。

常吉は、声を耳にした。

『常吉つあん。とうとう遣りましたね。おめでとう。でも、お前さん、まだまだこれからだよ』

その声は、志津のものだった。

『隆佐衛門詞譚』

「埃」

編集・発行者 エムツー・プラデオ
三谷 弘

二〇〇三年一月十二日

禁無断転載・複写